

第二言語話者のアイデンティティ実践について

—「学び」を中心にしたアイデンティティ構築—

スペイン・ドリュー(筑波大学大学院生)

1. はじめに

近年、第二言語習得研究においてFirth & Wagner(1997)をはじめ、第二言語話者(以下、L2 話者)を第一言語話者(以下、L1 話者)と比較して「不完全」な話者とする捉え方を見直すという動きが特にL2 話者のアイデンティティを扱う研究で見られている。アイデンティティという概念自体が人々の不変的な属性から他人との相互行為において協同的に構築する産物として捉えられるようになってきた流れ(Antaki & Widdicombe, 1998)に伴い、L2 話者のアイデンティティに焦点を当てた研究も彼らが相互行為において常に「L2 話者」というアイデンティティの下で参加しているわけではないこと、かつ自立した話者であることを明らかにしてきた(細田, 2008; Park, 2007; Cashman, 2005; Kurhila, 2001 など)。ただし、このような研究が第二言語習得研究に大きな貢献をもたらしたものの、完全にL2 話者のステータスに関するバイアスをなくしているとは言い難い。なぜなら、参加者の構成が当たり前のようにL1 話者—L2 話者となっており、「L2 話者」としてのアイデンティティが彼らの言語能力・知識の不足の可視化以外の行為によって構築される可能性を排除してしまっているからである。つまり、L2 話者がL1 話者に比べて能力を欠けた者であるという先入観をより局地的なレベルで再生産していると考えられる。

本研究はそのような背景のもと、複数の日本語L2 話者の参与が見られた相互行為をデータとして扱い、彼らがどのようにして自分のL2 話者としてのアイデンティティを構築するかを明らかにすることを目的とする。本稿ではL2 話者のアイデンティティ構築が観察されたカテゴリー化実践の事例を取り上げ、ケーススタディーを通してこれまで報告されてこなかった「L2 話者」のアイデンティティ構築の仕方を示す。

2. データ及び方法

本研究の対象となったのは、東京都におけるシェアハウスの居住者の日本語L1 話者8名及び日本語L2 話者3名²である。L2 話者は全名英語L1 話者であり、場合によって英語が共通語として使用されていた。ただし、日本語L1 話者が居住者の過半数を占めていたため、日本語がより多くの場面において共通語の役割を果たしていた。シェアハウスの居住者は共用のラウンジを利用し、食事や飲み会、映画観賞、ゲーム会などといった活動をしながらか交流をしていた。データ収集に関しては、このような活動の一部として行われたグループの自然会話の録音・録画を実施した。2019年に2回に渡り、計5時間半のデータを収集した。本稿で掲載する断片はゲーム会からの抜粋である。なお、シェアハウスや参加者についての背景知識を補足するためにフォローアップ・インタビューやフィールドノーツを、ビデオ通話やシェアハウスへの訪問を通して行った。

分析にあたっては、会話分析と成員カテゴリー化分析を統合した sequential categorization analysis(Bushnell, 2014)という手法を用いた。この手法は会話の連鎖とカテゴリー化の再帰的な関係を視野に入れ、参加者のアイデンティティ実践を彼らの視点からの分析を可能にし、また参加者の間の関係がどのように構築されているかについての示唆を与えるということを踏まえて本稿の分析方法として採用した。

3. 分析

本節では、L2 話者が当ゲーム会の以前の相互行為において学んだ「片手」という日本語の語彙がいかに「L2 話者」のアイデンティティ構築の資源として用いられるかを示す。

¹ 本稿は2019年に出した修士論文の内容の一部に基づいたものである。

² 著者も参与観察という形で日本語L2 話者として参加していたため、本稿で取り上げる断片において日本語L2 話者は実質上4名である。著者はL2Cの表記で示される。

以下の断片1においてL1A, L1B, L2A, L2B, L2C, L2Dは「ジェンガ」³というテーブルゲームをしている。L1AとL1Bは当ゲーム会でジェンガに初めて参加しているが、L2話者たちは既にジェンガを数回している。断片1のゲームの前回では、両手を使つてはいけないというルールが言及された経緯で「片手」の日本語がL2AとL2Dに要求され、L2C及び別の参加者L1Eによって提供された。つまり、「片手」は断片1の時点ではL2A, L2B, L2Dがつい最近学んだ語彙である。

【断片1】⁴((1:20:13))

- 01 L1A: え:::受け取れない:::
 02 (2.0)
 12a +L1Aの右手をタワーから離れるように押す
 03 L2A: 片+[手
 04 L2B: [°hehehe° ((D, T 笑顔))
 05 L1A: あっかた-HA [HAA
 06 L2A: [hahaha
 07 L1A: すげ::-
 12a +L2C、そしてL2Bに向けて指鉄砲というジェスチャーをする
 12c +L2Aにジェスチャーを返す
 08 L2A: [+ayy[:::[:+↑[:::: hahaHAHA
 09 L1A: [厳 [しい [だよ [これ.
 10 L2B: [haha[ha [
 11 L2C: [nice.[
 ナイス
 「ナイス」
 12 L1B: [あれそう やばい(な これ)
 13 L1A: え:もう
 12d +ジェスチャーを真似てL2Cに指しながらL2Aに視線を向ける
 14 L2D: +did he win?
PRT 3 勝つ
 「勝ったの、彼?」

01行目において、L1Aはブロックを受け取る困難さに言及する。次の02行目で2.0秒の沈黙が続くが、その間L1Aは姿勢を変え、タワーを両手で囲むように動く。それを見るL2Aは03行目で「片手」を発しつつL1Aの右手がタワーから離れるように彼を押す。つまり、以前のやり取りにおいて学んだ「片手」という語彙を利用してL1Aに対する指摘を行う。これに対して、L2Bは04行目で笑い、L2Aのこの行為及び「片手」という語彙に対する理解を示す。L1Aは指摘され05行目で「あっかた-」を発し、指摘を新情報として受け止める。順番を再開する時に片手であることによってL1Aはこれが指摘であることに対する理解を示す。05行目、そして06行目においてL1AとL2Aが笑い、協同的にL1Aによるルール違反を「面白い」ものとして扱う。

07, 09行目においてL1Aはもう一度ゲームの難しさに言及し、自分が両手を使おうとしたことを難易度と関連付けるが、L2Aの注意はL2Cに移行する。08行目では、L2AはL2C、そしてL2Bに向けて“ayy:~”という発話をする。これは親指を立たせ人差し指を伸ばすジェスチャー(図3を参照)とともに産出される。このジェスチャーは指鉄砲(finger guns)と呼ばれ、Ford(2013)において取り上げられた「ヒップな挨拶(hip greeting)」の一つである。ヒップな挨拶とは、「こんにちは」などの以上の機能を有し、挨拶をする人とされる人の間に共有されている暗黙の了解への言及としても機能するという。つまり、指鉄砲というジェスチャーは仲間同士でしか理解されない何かへの言及を通して仲間同士であることの合図として用いられるジェスチャーである。なお、08行目の“ayy”も似たような挨拶的な意味を持つスラングであり、英語圏においてこのジェスチャーと共起することがある。L2Aがここで指鉄砲をL2CとL2Bに向けて用いるのは彼

³ 「ジェンガ」というのは、ブロックからできているタワーからブロックを片手で一個一個抜き取り、またタワーの最上段に乗せていくゲームである。タワーを崩した人の負けとなる。

⁴ Jefferson(2004)の転写法と、それを日本語の表記に対応できるように工夫した串田・平本・林(2017)に基づいて文字化を行った。また、「+」という記号をジェスチャー及び身体動作の開始する時点を示すために用いる。身体動作の動作主は小文字で表記される。

らをL2Aの仲間として指定する行為であると考えられる。3人の共有する暗黙の了解に関しては、L2Aが03行目で一緒に学んだ「片手」を指摘という実践に取り入れていることと関連性があると考えられる。要するに、L2Aは「片手」という語彙の習得を仲間同士の共通経験として扱っており、L2CとL2Bから同様の認識を求めているのである。



図3 L2Aの指鉄砲をしている様子

L2Aの08行目の振る舞いに対してL2Bは10行目において笑い、理解を示していると考えられる。次の11行目では、L2Cが“nice.”を発し、より明示的にL2Aの08行目の発話とジェスチャーをどのように理解したかを示す。“nice”(ナイス)と言うことにより、L2Aの03行目に対する評価を行う。ルール違反に対する指摘が褒め言葉を伴わずに何度も行われてきたこの文脈において、この評価は指摘自体に対するものではなく、「片手」という新しい語彙が使えたことに対するものであると考えられる。また、これは指鉄砲の最初の受け手がL1話者ではなく同じL2話者の身分でその語彙を教えてくれた者であったことから伺える。

断片の続きにおいてL1BとL1Aが07行目で開始したゲームの難易度についてのやり取りを続き終了する(12, 13行目)。直後の14行目では、指摘のやり取りの間に鼻をかんでいたL2DがL2Aの指鉄砲を真似、そのジェスチャーを対象に修復を要求する。その際、“did he win?”(勝ったの、彼?)という理解の候補の入った質問を産出する。この発話及び、その後L2Dが直前のやり取りを聞いていなかったと説明することから、指鉄砲の使用が何等かの成功への言及として用いられたという理解が示されている。つまり、L2Aの08行目の発話及びジェスチャーに、自分が何か成功したという意味が含まれていると考えられる。そして、それがL2Cの11行目の“nice.”で示されている理解と一致し、新しく習得した「片手」を03行目で用いられることができたということであると考えられる。

4. 考察

断片1において、L2Aがそれ以前のやり取りにおいて学んだ「片手」という語彙を、ゲームに関連する「指摘」という行為に取り入れたが、それはL2話者というアイデンティティ構築にどのように関係しているのだろうか。新しく習得したL2の言葉を用いることだけでそのアイデンティティを喚起できるとは限らない。しかし、L2Aはそれ以上のことをしていると考えられる。つまり、あえて「片手」を普段使っている日本語と区別し、それが「学んだ語彙」であることを前面に出すことを通して自分を「L2の言葉を学ぶ者」としてカテゴリー化する。言い換えれば、「L2の言葉を学ぶ」という活動を「L2話者」というアイデンティティのカテゴリーに結び付け、そのアイデンティティを再構築する。

このプロセスについてより具体的に述べると、「片手」の含めた発話の直後、成功を指標する指鉄砲というジェスチャーを用いることでL2AはL2の学びに間接的に言及している。また、その学びの成功に対する認めを他のL2話者から要求しつつ彼らをそのような経験が共有できる「仲間」として扱う。そして、L2Bと特にL2Cから要求していたような反応を得、「片手」がL2AとL2Bにとって「学んだ語彙」であるという間主観性が相互行為において可視化されるようになった。要するに、L2Aはこのやり取りにおいて、「L2の日本語を学んだ」ということに志向を示しており、日本語を学ぶという活動をする「日本語L2話者」のアイデンティティにも志向しているのである。このことによって、言語能力・知識の不足に基づくアイデンティティとしてではなく、積極的な「L2話者」としてのアイデンティティが構築されているのである。

5. おわりに

以上、従来のL2話者のアイデンティティ研究で扱われた参加者の構成と違い、L1話者及び複数人のL2話者からなるグループのやり取りにおけるアイデンティティ実践を分析してきた。その結果、L2話者というアイデンティティが必ずしもL1話者に照らし合わせられ能力の不足により構築されるものであるとは限らないことを示した。その上、学びという知識の蓄積を特徴とした積極的なL2話者のアイデンティティ構築を明らかにした。そのことを示すことによって、エスノメソドロジー的な観点から行われた、参加者の視点を重視したアイデンティティ研究においても、参加者の構成を決める上で研究者の持つバイアスが反映されることがあるということを指摘できた。つまり、「L2話者」のアイデンティティを取り上げた先行研究においてL1-L2話者のやり取りが最も多く分析の対象とされてきた結果、L2話者同士のやり取りにおいて同じ「L2話者」アイデンティティの構築を巡って多様な実践が可能であるということが見逃されてきた。言い換えれば、先行研究がこれまで「L2話者」のアイデンティティを「L1話者」との対の一方だけとして捉えてしまい、「L1話者」から独立したアイデンティティとして構築されないという前提で研究を進めてきた。そしてそのため、参加者自身の志向性を見ることを通してL2話者を未完成のL1話者としての捉え方を避けるはずだった研究が実際に同様のバイアスを再生産していたといえる。

今後の課題として、学びに結びついたアイデンティティ構築と語彙学習の関係を探る研究の必要性を挙げたい。

参考文献

- Antaki, C., & Widdicombe, S. (1998). Identity as an achievement and as a tool. In C. Antaki & S. Widdicombe (Eds.), *Identities in talk* (pp. 1-14). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Bushnell, C. (2014). On developing a systematic methodology for analyzing categories in talk-in-interaction. *Pragmatics*, **24**(4), 735-756.
- Cashman, H. (2005). Identities at play: Language preference and group membership in bilingual talk in interaction. *Journal of Pragmatics*, **37**, 301-315.
- Firth, A., & Wagner, J. (1997). On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research. *The Modern Language Journal*, **81**(3), 285-300.
- Ford, P. (2013). *Dig: Sound & Music in Hip Culture*. Oxford: Oxford University Press.
- 細田由利 (2008). 「第二言語で話す」ということ—カタカナ英語の使用をめぐる— 社会言語科学, **10**(2), 146-157.
- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In G.H. Lerner (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation* (pp. 13- 31). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Kurhila, S. (2001). Correction in talk between native and non-native speaker. *Journal of Pragmatics*, **33**, 1083-1110.
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017). 会話分析入門 勁草書房
- Park, J.-E. (2007). Co-construction of nonnative speaker identity in cross-cultural interaction. *Applied Linguistics*, **28**, 339-360.